## 鳥取大学

| 訪問調査対象プログラム名 | メキシコ海外実践教育プログラム |
|---|---|
| 類　　型 | 語学研修型・教養履修型・フィールドワーク型×選択型 |

### Ａ．海外プログラムの詳細

【要旨】

- 乾燥地帯であるメキシコにおける持続可能性への取り組みと、それに関する技術開発を講義やフィールドワークから学び理解するための約 6 週間のプログラムである。
- 元は農学部の専攻と関係したプログラムとして 2005 年に開始されたが、2008 年度から全学共通プログラムに変更になった。
- 約 17 回にわたる事前学習プログラムと、数回にわたる事前研修では内省に重点を置いて行われる。
- 鳥取大学独自のグローバル能力評価法（ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR を援用した）が開発され、プログラムアセスメントに活用されている。

### １．教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

全学、学部あるいは学科での DP あるいは教育目標との対応関係が明確である

同大学では、「知と実践の融合」という教育理念にしたがい、教育グランドデザイン（大綱）を策定し、課題解決に必要な深い専門知識の修得とその専門知識を地域社会の課題解決に活かすために必要な実践力の強化を目指し、特に、1)「人間力を根底に置いた教育」と 2)「様々なフィールドで多面的視野を持ちグローバルに活躍できる人材の育成のため、教育の場を世界に求める」ことを重視し、グローバル人材育成に取り組んできた。

同大学は砂丘に関する研究から出発して、水資源に乏しく様々な課題を抱える乾燥地の問題を解決するための世界的な研究拠点となっている。本プログラムは現在、どの学部の学生も参加できる学部横断的な教養プログラムとして位置づけられているが、その前身はこの乾燥地研究活動を背景とした、農学部の独自プログラムとして育まれてきたという経緯がある。したがって、本プログラムを含む同大学の海外実践教育プログラムは、メキシコ（本プログラム）とウガンダといった乾燥地の克服を課題とする国々で行われている。こうした地域での経験や学修を通じた、タフな人材の育成と知と実践の融合が本プログラムのテーマである。本プログラムの教育目標は以下の通りである。

各分野の学生がグローバル社会で活躍する上で重要なグローバル人間力を強化するため、異環境・異文化の中で、言葉の壁や理論と現実の差をはじめとするさまざまな困難に直面しながら成長し、現場に強い、打たれ強い、変化に強い「タフで実践力のあるグローバル人材」に成長することを期待している。

## ２．海外プログラムの実施状況とその内容

教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】8 月中旬～9 月末

【実施期間】約 6 週間

【実施場所】南バハカリフォルニア自治大学（UABCS）、北西部生物学研究センター（CIBNOR）

【参加学生数】2018 年度 5 人、2019 年度 9 人

【プログラムの具体的活動内容】

2019 年度を例にとると、最初の 1 週間は南バハカリフォルニア自治大学において語学を学ぶ。（英語 11 時間とスペイン語 15 時間。）参加に際しての英語力は TOEIC400～500 点を基準にしている。

2 週目から始まるモジュール 1 では、「南バハカリフォルニアにおける持続可能な社会の構築～地域資源の活用～」について学ぶ。少雨地域でいかに持続可能な社会を築こうとしてきたかを、太古からの歴史と現代社会、文学、経済、産業、環境、水資源などの観点から総合的に理解する。派遣先大学の専門の教員によるレクチャーを受けての派遣先の学生と議論を行い、フィールドワークも行うなど、10 日間、計 10 のセッションが実施される。

学生はモジュール 1 の最後に英語でプレゼンテーションを行う。これは個人発表で、発表内容については、事前学習で現地のことを調べてテーマもある程度設定するが、現地で変更する場合も多い。現地でのフィールドワークやアンケートを取るなどして調査した結果を発表する。現地の学生がマンツーマンでパートナー学生として付き、講義の議論やプレゼンテーションにおける調査、パワーポイント作成も協力して行っている。

続くモジュール 2 は「乾燥地における技術開発～未来を拓くイノベーション～」がテーマで、高温と少雨という環境下での新たな農業技術開発、畜産技術開発、水源地保全やバイオテクノロジーなどを、モジュール 1 と同様のレクチャーと議論、フィールドワークなどを通じて学ぶ。ボリュームもモジュール 1 とほぼ同じ。モジュール 2 の最後にも、モジュール 1 と同様に英語によるプレゼンテーションが行われる。

その後、メキシコシティに移動し、メキシコ国立自治大学、日本大使館や JICA、テオティワカン遺跡などを訪問して帰国する。

## ３．事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

全学・学部・学科のカリキュラムと連携している（事前・事後いずれかに関連科目がある）

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが潤沢に用意されている

鳥取大学では、いわゆる事前学習に先立って、海外プログラムに参加する学生は 1 セメスターにわたって開講される「海外安全マネジメント（2 単位）」の受講が義務づけられて

いるほか、英語およびスペイン語の学習が推奨されている。

事前学習については、昼休みあるいは放課後に海外プログラム参加者を一堂に集め、国際交流センター教員等の関係者が計 17 回（2018 年度）にもわたる授業を実施している。その内容は、オリエンテーション、海外実践教育の意義、現地でのフィールドワークおよび講義に関わる準備、現地に焦点を当てた安全教育・情報提供・健康管理、海外旅行保険等説明、異文化コミュニケーションなど多岐にわたる。現地でのプレゼンテーションに向けた準備については、テーマの仮決定や役割分担、その準備に基づく事前プレゼンテーション、さらには「協働的コミュニケーションと異文化理解」のためのケースメソッドを援用したケース学習のワークショップなども含まれている。

事後学習は、最終報告書の作成および TOEIC の受験の他に、学生が海外プログラムの体験を振り返る「内省」の場としての事後研修が設定され、「ピア内省（仲間と共に内省）」と「個人内省」の両方が取り入れられている。

この事後研修では、他の海外プログラムの参加者と一緒に、①「自己内省」では「モティベーションマップ」と「海外経験と気づき表」を個人で作成する。②「ピア内省」は 2 回行われ、1 回目は他の海外プログラムを含む 4 プログラム参加者が混合する形でグループを形成し個人課題として作成してきた「モティベーションマップ」と「海外経験と気づき表」をもとに、グループ内での情報共有と経験の意義付け、価値付けのためのディスカッションが行われる。2 回目では、このピア内省をもとに、学生個々人の次のステップへの個人内省への動機づけとして、次期プログラム実施情報の提供と長期留学経験者によるミニ報告会が行われている。

また同大学では、独自にグローバル能力評価法を開発しており、「グローバル人間力」「グローバルリテラシー」「グローバルコミュニケーション力」など 16 項目についてそれぞれ 10 点満点で自己評価を行っている。

### ４．効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

**海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある**

**プログラム設計の共有、プログラム修正機能、あるいは次年度への引き継ぎ体制の何れかについての学内コンセンサスがとれている**

アセスメントとしては、学生の 2 回のプレゼンテーションを鳥取大学とメキシコ側の教員が内容、構成、発表態度、総合評価の 4 つの視点から評価している。

学生には、メキシコで参加した授業やフィールドトリップについて、難易度、有用度、満足度を 5 段階で評価する授業評価（授業アンケート）を記入させている。また、自己評価として、渡航期間中の自身のモチベーショングラフと先述のグローバル能力評価とを作成させている。こうして提出された授業評価と自己評価に加えて学生に課している最終報告書を、南バハカリフォルニア自治大学の担当教職員とも共有し、プログラム改善に活かしている。また本プログラム実施中にも、鳥取大学の引率教員とメキシコ側関係者が緻密に意見交

換を行っており、プログラム終了時にはその年度のプログラム評価と次年度への改善案などの意見交換が行われ、プログラム改善へと結びつけている。

改善例として、メキシコのパートナー学生の配置の問題がある。ある年度には、メキシコで日本語を学ぶ学生をパートナー学生としたが、本プログラムのテーマには無関心であったために、翌年度以降は変更している。また、メキシコ側からの提案で、出発前にスペイン語の授業を TV 会議システムを使って行うようになったことも挙げられる。

### ５．本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

本プログラムの単位認定は、学生の所属学部において全学共通科目または専門科目の単位として認定される（科目単位数は学部によって取り扱いが異なっている）。標準的には語学（英語）1 単位、語学（スペイン語）1 単位、実習・調査（持続可能な社会）1 単位、（技術開発・イノベーション）1 単位の計 4 単位である。

独自の奨学金としては、「地域学部」および「工学部」がそれぞれ海外留学を希望する学部所属学生に奨学金を支給する制度を設けており、本プログラム参加学生にも支給される。また、鳥取大学独自予算によって本プログラム実施経費（講師謝金等）を負担しているため、参加学生の個人負担は大幅に軽減されている。

### ６．本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

同大学では本プログラムを、より長期間の留学や難易度（専門性）の高い「協定校への交換留学」、「鳥取大学 ITP」、各学部の専門教育で実施する海外プログラムへの参加の第一歩として位置づけている。例年本プログラムに参加した学生から、交換留学や長期留学、上述の「鳥取大学 ITP」に参加する学生が輩出されている。

## Ⅱ．学生インタビュー

### １．鳥取大学学生１（工学部化学バイオ系学科合成化学プログラム４年）

#### （１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学入学前は、さほど英語の学習が好きだというわけではなく海外プログラムに参加しようということも考えたことがなかった。海外プログラムに参加したいと思うようになったのは、大学入学後、生協が開催している「英語コミュニケーション講座」で異文化に触れたことがきっかけである。この講座は、鳥取大学に来ている留学生も受講していて、初めて外国人の友人ができた。講座では、自ら積極的に話しかけるといった、特に対話におけるコミュニケーションの姿勢の重要性などについて身をもって学んだ。

1 年次の春季休暇（2-3 月）に 6 週間の海外プログラム「春季オーストラリア英語研修」に参加した。内容は、アデレード大学（シドニー）の ELC（English Learning Center）で

英語を学習するプログラムで、この時、現地の家庭でホームステイを体験することもできた。英語のクラスでは、渡航後最初の 3 週間は先生の話していることが何とか聞き取れはしたが、意見を述べたりすることがなかなかできず、話せないもどかしさを感じた。しかし、3 週間経った頃に、所属していたアデレード大学の日本文化を楽しむサークルで現地の友人ができた。彼らと話しているうちに、間違えてもよいからまずは話してみることが大事であるということに気づき、少しずつ積極的に話せるようになっていった。また現地の学生たちもさまざまな地域から移住してきている人も多く、日本人だからと疎外感を感じることもなかった。ホームステイ先のホストファミリーは、土日になると牧場などいろいろな場所に連れて行ってくれるなど大変親切に接してくれ、プログラムの終盤では日本に帰りたくないと思っていたほどである。この海外プログラムへの参加を経て、もっと異文化を体験し理解したい、ホームステイをもっとしてみたい、という気持ちがさらに強くなった。

帰国後、2 年生の時には、鳥取大学に来ている留学生たちと国際交流活動をしている団体に所属して、留学生たちと話したり文化交流をしたりした。3 年生になった時、1 年次以来かかわってきた生協主催の「英語コミュニケーション講座」で講座のリーダーを務めた時、英語はだいぶ話せるようになったけれど、非英語圏に行ったならば、これまで身につけたコミュニケーション能力はどれくらい通用するのだろうかと考えた。そこで、非英語圏のメキシコに赴く「メキシコ海外実践教育プログラム」に参加することを決意した。

### （2）参加した海外プログラム

2018 年度に参加した本プログラムでは、渡航後最初の 2 週間は、ラパスにある大学と研究機関との 2 つの機関で、スペイン語、メキシコでの生活や文化、そして英語について学んだ。スペイン語については、例えば、街でジュースを買う時の会話、写真を撮ってもらう時の会話など生活に必要な表現を中心に学んだ。英語については、文法を学ぶだけでなくプレゼンテーションのトレーニングも重視した指導を受けた。そこでは、あまり文法を気にしないで、間違っていてもよいので、とにかく発言してみることが重要だと教わった。

3 週間目以降では、大学の多種多様な専門分野の先生による授業を受けた。フィールドワークが多く盛り込まれ、海洋保全、農業、酪農、そしてサイエンスなど、メキシコの今を体験的に学修できる授業であった。特に印象的であったのは海洋保全の授業である。車で 3 時間かかる海の近くに行き、泊りがけで学修した。海洋保全の仕事についての講義、生態系の問題、海洋プラスチックの問題、生分解性プラスチックの研究など、海洋保全に関する多くのテーマを扱った授業を受けることができた。また先生や関係者を前にして、渡航中に学修したり活動したりした内容をプレゼンテーションする機会が 2 回あった。

ホームステイは無かったものの、現地大学生が毎日朝から晩まで付きっきりで面倒を見てくれて、充実した毎日であった。

### （3）事前・事後学習について

事前学習では、主に 2 つのテーマに取り組んだ。1 つがメキシコの社会・文化（食生活、医療、健康、環境問題など）についての講義、2 つめがメキシコの大学で日本の文化や課題（農業、海洋保全、地域活性化など）を発表するための資料作りである。

事後学習としては、報告会の開催と事後研修会の 2 つの取り組みが挙げられる。報告会については、当プログラムへの参加を希望する学生に向けた報告会の開催である。資料を作成したり発表したりする中で、自分たちがどうしてこの活動をしたのか、それに何の意味があったのかなどを振り返ることができた。事後研修会では、自分自身の能力がどう向上したのかをグラフに書いて発表した。グラフ化の作業を通して自身の成長を視覚化できて、これからすべきことが明確になった。

本プログラムは鳥取大学のカリキュラムとある程度連携していると考えている。その理由は、カリキュラムには、南米の文化を学ぶ科目、環境問題を扱った科目、そしてグローバルな視点で物事を考えさせるような科目がいくつも開設されているからである。

### （４）成長を感じる点

本プログラムでは、多くの能力や素養が身についたと感じるが、特に異文化対応力、語学力、専門的知識が身についたと感じる。

異文化対応力については、キスやハグといった現地の挨拶に関するもので、最初はぎこちなかったが、少しずつ習慣として受け入れることができた。

語学力については、英語とスペイン語の両言語とも力がついたと感じている。現地の大学生との会話では、学修の内容だけでなく日常会話に至るまで、朝から晩まで英語で会話をしていた。またショッピングなどでメキシコの街に出掛けた時には、スペイン語で会話をしていた。渡航前に半年間、週 1-2 回のペースでスペイン語を学習してきたおかげで、聞いたり話したりすることが多少できるようになった。

専門的知識技能については、海洋保全、農業、酪農、サイエンスなど先端の研究をしている現地の大学の先生の授業で学修したことによるものである。DNA に関する技術的な内容、日本では学べないような薬草の講義、メキシコという地域に根ざした研究の講義など、大学で学ぶことの意味のようなものを改めて感じることができた。加えて自分の専門分野である化学が好きなのだということを再認識できた。

### （５）満足・不満足な点

満足していることは、①メキシコという国の素晴らしさを知ることができたことと、②様々なテーマの授業を受けた結果として自分の将来の夢が見つかったことである。

満足できなかったことは、現地でホームステイができなかったことである。

（６）今後の学修

大学院に進学し、イギリスあるいはオーストラリアの大学へ 1 年間の研究留学に行ってみたいと考えている。本プログラムに参加した時に、現地で子供たちに実物を見せながら化学や自然を教える人たちがいるのを見て、自分もそのような仕事をしてみたいと思った。調べてみたところ、そうした仕事はサイエンスコミュニケーターと呼び、その実践の最先端はイギリスやオーストラリアであることを知った。大学院で研究テーマを極め、その上でサイエンスコミュニケーターになることができればと思っている。

２．鳥取大学学生２（持続性社会創生科学研究科工学専攻修士課程２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

中学校時代サッカーの友達に、ブラジル人が数人いたが、相手が日本語を話せたので、海外を意識することは無かった。大学選択時も、海外を意識したことは無かった。子供の時から続けていたサッカーが強い大学が、選択のひとつの理由であった。

海外プログラムとの出会いは、大学でサッカー部に３年前期まで所属し、引退後に何か大学時代にしかできない新しいことにチャレンジしたいとの軽い気持ちが始まり。学部時代は、工学部に所属。大学３年後期の春に台湾での３週間の英語研修に参加した。その後、大学院に進学し修士１年後期に、水の供給方法を研究テーマとし、トビタテ！留学 JAPAN で研究留学としてオランダとウガンダで６カ月学んだ。

帰国後、残された学生時代が約１年という中で、自分が知っている海外を今までの３カ国に加え、もう１カ国増やしたいとの想いがあった。

大学が提供する「メキシコ海外実践教育プログラム」は、学部２・３年生が参加することが多く、また乾燥地域研究中心の農学部向けではあるが、内容を見ると乾燥地域での水利用・水問題が学べるプログラムも多く、工学系である自分の研究領域にも非常に魅力的であった。大学院生にとっても得られるものが大きいと期待して、選択することとした。

他の民間プログラムに参加する機会も得ていたが、国際交流課が発行している報告書を見て、説明を受けたことも、本プログラムを選択する要因となった。事前に内容がわかり、期待が高まっていた。

（２）参加した海外プログラム

本プログラムは、鳥取大学がメキシコの南バハカリフォルニア自治大学(UABCS)とメキシコ北西部生物学研究センター(CIBNOR)との長年の信頼関係の中で作られたプログラムのため、色々な施設を訪問できる内容の充実度合いは素晴らしい。

現地側の学生が、パートナー学生として私に２人ついてくれた。

実践英語と実践スペイン語の語学プログラムが、１週間程度設けられた。鳥取大学生のみのクラスではあるが、参加９人を、英語は１クラス、スペイン語は２クラスに分けて運営さ

れた。

滞在は、全６週間のうち後半４週間はホームステイで、各１人で振り分けられていた。自分のホームステイ先は、両親と長男・妹で、長男は自分と同じ年齢であった。両親は、英語を喋ることはできなかった。

プログラムの中心は、各２週間で行われる講義が組み込まれたフィールドワーク。

前半の「南バハ・カリフォルニア州における持続可能性社会の構築～地域資源の活用～」（モジュール１）と後半の「乾燥地域における技術開発～未来を拓くイノベーション～」（モジュール２）から成り立っている。

期間中、語学の授業でもフィールドワーク授業でも、プレゼンテーションを行うことがあり、パートナー学生と協力して、準備・発表することが多かった。

スペイン語の授業での発表準備では、パートナー学生にかなり助けられた。

フィールドワークのモジュール１・２での発表は、自分が台本も作って、パートナー学生に手伝ってもらう形を取っていた。自分についてくれた、パートナー学生は、学部生で、経済が専門で、自分のテーマの水とは直接的な繋がりはないが、モジュールの各授業も、自分たちと同時に受講しているので、それぞれの視点でディスカッションできたし、何よりメキシコ事情を分かることが、プレゼン準備には大きな助けとなった。

**（３）事前・事後学習について**

事前学習としては、初回留学経験前の大学３年次に、全学共通科目「海外安全マネジメント」を履修した。その前後には、実践的語学力の強化・維持を目的に課外の「語学強化コース（週２回)」の英語を継続して受講した。

今回は、メキシコ側でのプログラム内容を確認し、それに繋がる内容を事前に調べた。

現地での学習や見学場所を事前に確認し、モジュール１では、海水の淡水化の見学を基にプレゼンをしようと事前に計画した。また、モジュール２では、水処理施設など現地での学びを踏まえて、自分の研究の「排水を利用して藻類を育てる研究」へ繋げながらまとめようと考えていた。学習内容を自分の興味に繋げ考えていると、現地に行けることにかなりわくわくしていた。

事前の「異文化理解のためのケース研修」にも参加した。留学経験があったが、ケース研修で、もう１度考え直すことが出来た。

事後学習としては、今回の主目的が知見を広げるということなので、帰国後の大学院での学びに直接的に繋がることはないが、就職で水にかかわる仕事に就くので、乾燥地の現場を知っている強さがあると思う。

また、大学主催の各種海外プログラムを束ねて実施される Global Gateway Program の事後研修の発表では、後輩たちに留学の魅力を伝える活動を、積極的に行っている。

（４）成長を感じる点

自分は、今までの複数回の留学を通して、人生が変わったと感じている。考えの幅が広がり、心が豊かになったと感じている。異文化理解もあるが、考え方や許容範囲が、広がった。

メキシコでも、ずっとシャワーが水だったこともしんどかったが、こんな地域もあるなとの経験になり、よかったことだと思う。今回の中南米は、今まで経験した地域と、民族的にも異なり、知見が更に広まった。メキシコ人と言う人を知れたことも、大きな成長と思う。サポート学生がいたからこそ、現地の人と接する機会も増えた。

学習面でも、モジュール１・２の研究の中身自体が、水研究の視点からしても、鳥取大学で学んでいる内容と異なり、学びの広がりや深みが増えた。

また、プログラム直接ではないが、別の参加者のホームステイ先の父親が休日にサッカーを行っていて、そのチームで毎回一緒に練習する機会に恵まれた。その中で、スペイン語を使う機会もあり、メキシコ人を更に理解することができた。今までの複数回の留学機会でも、サッカーを通しての友人の広がりもあり、サッカーで自身の世界が広がってきたことも事実である。

（５）満足・不満足な点

プログラムの充実度合いには、本当に満足している。「脱塩装置で海水を淡水にして生活用水にする」「JICA メキシコ事務所が協力している魚の養殖に利用した水を再利用して水耕栽培で野菜を育てる」「海外の下水処理場の中に入っての見学」など、個人では絶対に行けない場所に行けたことに、非常に満足している。

また、費用が適切で、JASSO 奨学金も利用できたので、これらの制度には感謝している。

不満な点は、個人的な問題だが、スペイン語が全然できない状態で行ったので、現地での語学教育で、スペイン語の授業時間数を多くして欲しかった。スペイン語がホームステイや現地でなかなか通じなかったことは、自分自身に悔しかった。それ以外の不満は全くない。

（６）今後の学修

メキシコでの経験は、自分の就職後に大きな影響があると思う。2050 年に水不足を抱える人が、世界人口の 40%以上になるとも言われている。企業が海外事業を更に広げる際に、水不足を前提に考える必要がある。就職先は、現在でも海外拠点はあるが、いわゆる先進国中心だが、今後途上国に乗り出す可能性があると聞いている。その際に、今回の経験は非常に大きいと感じている。

３．鳥取大学学生３（農学部生命環境農学科３年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校は国際科で、英語は力を入れて勉強していた。また高校では英語以外にもイタリア語

とスペイン語を学んだ。帰国子女も多く、異文化体験も豊富だった。ただ将来は語学力だけでは社会に通用せず、語学力とプラスアルファの技術が必要と考えて農学部を選んだ。入学前には、海外留学には必ずとまでは言えないが、ぜひ行きたいと考えていた。

大学入学後、スペイン語を履修し、メキシコの大学生が鳥取大学に来た時に交流していたこと、コーヒー好きかつ農学部でもあることから中南米のコーヒー栽培にも関心を持っていたことなども、本プログラムへの参加を決めた伏線にある。このプログラムを選んだのは、スペイン語と英語が使え、期間も長く、異文化体験もできるから。農業や生態系に触れることができるのも魅力だと感じた。

**（２）参加した海外プログラム**

自分が参加したのは 2019 年度で、参加者は全部で 9 人。8 月 19 日に出発してメキシコシティに着くとまず日本大使館に行って、現地の状況を聞いた。

その後、ピラミッドに行った。これは観光と歴史の勉強を兼ねたもので、民間のツアーガイドが英語で説明をしてくれた。メキシコシティでは、他に国際トウモロコシ・小麦改良センターや国立博物館を見学し、説明を受けた。

ラパスに移動して現地の大学で授業がスタートした。最初の 1 週間は朝から夕方まで語学学習がメインで、英語とスペイン語を学んだ。スペイン語の学習は英語で行われるが、これは分かりやすかった。英語はリーディング、文法、コミュニケーション、ディスカッションなどの授業があった。ノンネイティブの英語に初めて触れたが面白いと感じた。

次の週からフィールドトリップが始まり、1 週間かけて 4 カ所をバスで回った。そのための準備として現地大学で地質学、生態系、歴史、文化等についてのレクチャーを受けた。

その次の 1 週間はまた現地大学で英語とスペイン語の授業を受けた。英語とスペイン語の授業のいずれにおいてもプレゼンが組み込まれていた。

また次の週はフィールドトリップがあり、フィールドワークの中で学んだこと、調べたことについてのプレゼンの準備も行った。自分のテーマはオーバーツーリズムが環境に及ぼす影響で、内容はマングローブの植林と水産業の養殖を組み合わせてオーバーツーリズム対策にするというものだったが、多くは現地でインターネットで調べたものに基づいている。現地の学生と共同で調査をしてまとめ、最後に一緒に 10 分ほどのプレゼンをした。

滞在中の 3 週間はホームステイしたが、ホストファミリーは英語もスペイン語もでき、「今まで 5 人の学生を受け入れたが、あなたが 1 番スペイン語ができる」と評価してくれた。それもあり、息子さんに教えてもらったりネットで調べたりしながら、滞在中もスペイン語学習に力を入れた。

**（３）事前・事後学習について**

英語とスペイン語については、授業を履修するとともに自分でも学習して準備した。その他に、海外でのリスク管理の科目を履修した。この海外プログラム固有の事前学習としては、

現地の文化や歴史についての講義を受け、フィールドトリップに関するプレゼンの準備をした。自分は生態系破壊のテーマを選び、調べて、一緒に派遣される学生に対して日本語でプレゼンするということも事前学習の一環として行った。ケース学習については、リスク管理の心構えをつくる上で役立った。

事後学習としては、他の海外プログラムに参加した学生と一緒に経験の共有や振り返りを行った。また事前事後の自己の能力評価と TOEIC の受験も行った。

**（４）成長を感じる点**

帰国後に英語の勉強に取り組んだこともあるが、事後に受験した TOEIC で 110 点上昇した。また事前事後の能力の自己評価では、伸びたのは状況に対応した行動、ポジティブな対応、コミュニケーション力などだった。自分でも文化の多様性を受け入れることができるようになったし、コミュニケーション力は高まったと実感できる。

**（５）満足・不満足な点**

盛りだくさんのプログラムで大変だったが、それ以上の経験ができたことに満足している。普通の旅行では行けないような古代遺跡や島などにも案内してもらった。

不満は特にない。

**（６）今後の学修**

メキシコで学んだコミュニケーションやグループワークなどは今の鳥取大学での学修に活きていると感じる。また、将来に関して、元々は国内志向だったが、やはりグローバルな視点や行動が大切だと考えるようになった。森林関係を学んでいるが、木材の仕事でグローバルに活動できるようになりたいと考えている。

**４．鳥取大学学生４（地域学部地域学科国際地域文化コース２年）**

**（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち**

母の友人がドイツにいたこともあり、母との会話の中でよくその友人の話が出てきていたので、幼い頃より海外についての特別な感情はなかった。自分は小学校 4 年生から英会話教室に通っていた。自分の住んでいた地域は田舎で、中高生の頃に、そこに留学生を招いてもてなす地域活性化のイベントがあり、自分も参加した。そのイベントでは留学生と共にウインタースポーツを楽しんだり、郷土料理を作ったりするような交流をした。自分も海外に行ってみたいと思ったが、部活動が忙しく、行くチャンスがあっても行けなかった。だから、大学に入ったら必ず海外に行ってみようと思っていた。

大学入学後、早速 1 年生の夏季休暇に、3 週間のプログラム「マレーシアマラヤ大学英語研修」に参加した。渡航前は、これまでの経験から自分は十分英会話ができると思っていた

が、いざマレーシアに行って自分を担当するバディと英語で話そうとしたが、特に渡航後 1 週間はお互いになかなか話していることを理解できなかった。これには自分自身の英語の拙さもあるし、バディも英語ネイティブというわけでもなかったことが挙げられる。しかし 2 週間経つとなんとか聞き取れるようにはなった。

1 年次の春季休暇には私が所属する地域学部が提供する 2 週間のプログラム「北米プログラム」に参加した。マレーシアで思うように英語でコミュニケーションをとることができなかったので、渡航前は特に英語学習に力を入れた。現地ではテーマを決めてフィールドワークに取り組み、その中には街頭インタビューにチャレンジするということがあった。自分は LGBTQ をテーマとしてインタビューをした。とにかく積極的に街を歩く人に話しかけて、3 時間で 30 人にインタビューすることができた。結果はレポートにまとめ提出した。
そして 2 年次に進級後、夏季休暇中に実施される本プログラムに参加することにした。

### （２）参加した海外プログラム

自分は 2019 年度に本プログラムに参加した。渡航後、メキシコシティに到着し最初の 4 日間は、JICA、日本大使館、ピラミッド、人類学博物館を見学した。

その後ラパスに移動して授業が開始された。前半はスペイン語と英語の学習が主であった。授業ではフィールドトリップがあったが、その事前学習として、生物多様性やエネルギー問題などをテーマにその概要について学んだ。

またメキシコの観光地として有名なある街を訪れたとき、自分の住んでいた地元と似ているように感じた。日本帰国後にこの地域について観光学の先生に尋ねたり調べたりしたところ、人口の規模や観光地としての戦略が自分の地元と似ていることがわかった。これをきっかけに、渡航した現地と日本にある自分の地元との地域性を比較してみることに高い関心を持った。

### （３）事前・事後学習について

事前学習では、本プログラムの説明、海外特にメキシコで生活する時のリスクについての説明、メキシコの文化（メキシコ人の慣習、食など）についての説明、そして現地で困らないよう基礎的なスペイン語の指導を受けた。また現地でプレゼンテーションするテーマとして日本の食文化を選び、そのための準備を進めた。

事後学習としては、海外プログラムの成果を報告する事後報告会があり、ここでは自分だけではなく、他の参加者が本プログラムに参加して考えたことも発表されたので、非常に勉強になった。

### （４）成長を感じる点

本プログラムに参加して自分が成長を感じる点は、異文化対応力と専門知識への関心が高まったことである。

異文化対応力が向上したと感じるのは、言語を十分に話せなくても、単語やツール、ボディランゲージを使って何とか伝えたいことを伝えて、置かれた環境に対応しようと頑張り切ることができたからである。滞在していたラパスでは、話されている言語がスペイン語で英語が通じず、拙くてもスペイン語で話す必要があり、何とか言いたいことを伝えようと必死で単語を並べて話した。ホームステイ先にはおじいさんとおばあさんもいて、彼らとは単語をスマートフォンで調べて会話をした。彼らとの会話の中で、メキシコの人々は家族を大事にする人々なのだということがひしひしと伝わった。

自分が関心を持った専門知識は言語教育についてである。メキシコ人が話すスペイン語は、日本語と発音の仕方が少し似ているように思うが、英語を話すと、発音の仕方など日本人よりもよほどうまいように感じた。そこで本プログラムの中でメキシコ人の先生から英語研修を受ける時には、先生の教え方にも関心を持って学習した。

**（５）満足・不満足な点**

満足したことは、ホームステイプログラムが含まれていたことである。ホストファミリーとはフレンドリーに会話することができた。その日にあったこと、日本の文化の話、将来の話など様々な話ができた。

満足できなかったことは、プログラムについてではなく、自分自身としてスペイン語をもっと学んで渡航すれば良かったと悔いていることである。これを踏まえて、現在、スペイン語の学習を頑張っている。

**６）今後の学修**

半年間程度の交換留学に参加しようと考えている。

まだ先ではあるが、卒業研究では、本プログラムで持った問題意識を活かし日本とメキシコの英語教育の比較をしてみたいと考えている。

現在考えている自分の進路については、自分の地元のような田舎を元気にさせたいと思っており、地域を元気にするのは子供たちや若者なので、小中高の教員になりたいと思う一方、博物館の学芸員や、外国人のための日本語教員などにも興味を持っている。